

協力事例2: 「タンソンニャット国際空港ターミナル建設事業」(円借款)

混雑緩和に向けて—新生国際空線ターミナルビル—

2007年7月、タンソンニャット国際空港のターミナルビルは年間1000万人の利用客が、スムーズに出発・到着できる空港に生まれ変わりました。新空港ビルの設計コンセプトは“分かりやすい旅客の移動”。日本の関西国際空港を参考に、複雑だった導線を改善したり、手荷物送出システムを刷新し、経済都市ホーチミンの発展を見据えた工事が行われました。

日越のプロの誇りをかけた仕事

この事業に対する円借款は、特別円借款用条件が適用されました。日本企業がメイン・コントラクターとなることを条件とし、ベトナム企業を下請けとして活用することによって、日本からの技術移転を図るもので特別に緩和された優遇条件(金利0.2%、返済40年)が適用されます。

日本の技術を生かしながら、“ターミナルビルの完成”という大きなゴールにたどり着くまでには、日越間の意見調整を含め多くの困難がありました。南部空港会社のVu Phan Nguyen Anさんは「何度も話し合いの場がもたれましたし、時には激しい言葉の応酬もありました」と当時を振り返ります。

意見の衝突。それは日越双方のプロフェッショナル達が「新しい空港ターミナルビルは利用者に優しい空港にしたい」と、互いの思い入れをぶつけ合う時間だったのです。

日本空港コンサルタンツの山田良平さんは言います。「とにかくあの酷い混雑を早く何とかしたい。女性やお年寄りがラウンジで楽に座って待てるようにしたいと考えていました。」



子供達に誇れる仕事にしたい

建設に携わる人それぞれの想いと誇りがぶつかり合う日々が続きました。それでも日越のプロ達が同じ夢を持ち続けていたのは、“子供達に誇れる仕事をしたい”という一念でした。

Anさんは、「私の子が他の子供に『僕のお父さんがこの空港を作ったんだ』って自慢するんです。なんともいえない気持ちでした。」Anさんのこの一言を聞いた時、山田さんの表情が一層明るくなりました。日越のプロフェッショナル達の卓越した技術と、不断の努力の結晶が新生タンソンニャット空港に息づき、次の世代に引き継がれていきます。

